
私と友達と日常

耶麻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と友達と日常

【Nコード】

N3500U

【作者名】

耶麻

【あらすじ】

私は山崎秋奈^{やまざきあきな}。ごく普通の小学6年生だと思う。私の周りにはちよつと変わった友達がいて……。その友達と私の物語！

ごく普通の私と変わった友達

私はごく普通の生活をしている。普通に学校に行って、普通の暮らしをして、普通に日常を過ごしている。

そんな私の友達は変わった人ばかり。普段はおとなしいし賢いの、友達の前になると糸が切れたかのように天然になり、変なこと言ったり……。絶対一つになる事のない「賢い」と「天然」が一緒になっている。もう一人は、いつもは頼れてお姉さんみたいなのに変なスイッチが入ると、もの凄い変なこと言ったり、好きな人のことを酔っ払ったかのように言ったりする。こんな変わった友達に囲まれた私は特に影響はなく（多少影響はあるが……）

ごく普通に暮らしている。一つ言うとしたら、テンションが異常に高いと言われる事か。そんな私の普通の日常がある出来事によって変わっていく。

バカな奴の勘違い

(今日は陽のところにいこーっと！楓もいたらいいな)

そんな事を思いながらウキウキした気分で廊下を歩く私は山崎秋奈。
陽とは土田陽菜つちはるなの事で楓とは染井楓そめいかえで。

陽は好きな人の事を酔っ払った様に話す癖(?)がある普段はしっかり者。楓はむっちゃ頭が良くて学年でも1と2を争う頭の持ち主。でも、友達の前になると何かの糸が切れたように天然発言を連発する。絶対に1つにならない『賢い』と『天然』が混ざった人。これが私の親友とも呼べる人達。こんな人達に囲まれてほぼ影響を受けていない私。あ、受けてるっちゃ受けてる。私は他の人に比べてテンションが高いと言われるだけだよ。

「陽！ってあれ？いない。あ、楓、陽は？」

「陽菜？んゝっとベランダにいるよ」

「あゝ風見か。そう言えばサッカーの日だったなゝじゃあ邪魔するのは良くないかゝんゝ楓話そ」

風見とは風見翔太かざみしょうたの事。風見は何故か女子には無口で喋りづららしい。私はクラス一緒だし、班も一緒だから良く話すよ。それで情報収集。それを陽に報告するんだ。陽に頼まれたしね。

「で、最近どうなわけ？奏とは」

「な、何でそんな事聞くの！？」

「ええ〜？何となく。楓は奏ラブだねー」

楓は佐伯奏さへりゆうの事が大好き。実は奏も楓の事が好きで2人ともお互いにその事を知ってるんだけど、まだ、付き合う仲には発展してないんだって。陽が言ってた。

「何で最後だけ棒読みなの？」

「何となくだってば。じゃ私、教室帰るわ〜また来るって陽に伝えてて」

「うん。バイバイ」

私は楓に手を振り自分の教室に帰った。

~~~~~

（うう・・・眠い！このポカポカも気持ちいいし〜！）

私は今、睡魔と闘っています！！私の席は窓際の一番後ろ。そして今はプールの後の4時間目。私が言いたい事分かる？プールの後の授業は何でも眠くなるんだよ〜！！！！

「ねむ・・・寝ようかな？」

「そんな事したら確実に説教だな」

「やっぱり〜？てか優は眠くないの？」

優とは戸倉優輝とくらゆうきの事。優とは小さい頃からの知り合いで幼稚園が一緒だった男の子。ま、今も結構仲がいい。で、今年クラスが一緒になって席が隣になった。

「俺がプールだけで疲れると思ってんのか。てか野球やってる人は秋みたいにはならない」

「それ嘘だよねー！涼おもしろいって寝てるし」

「……」

優は呆れた様な表情をした。涼も小さい頃の知り合い。そして優と一緒に野球をやってる。優と涼のチームは凄いらしく、中でも優、涼、その他数人は活躍中らしい。注目されてるって本人達が自分で言ってた。

「あいつは例外。とにかく寝んなよ？先生、怒ったらこえーんだから」

「ん、頑張る。そういえば優って好きな人とかいるの？そういうの全然聞かないけど」

「……いる、かな」

おお！これは新事実。ってかいたんだ。冗談で言ったんだけどまさかあの優が素直に認めるとは……凄いものを見てかも。私は誰？と目で問う。

「ん……お前」

そこでしばらく沈黙。

「って言ったらどうする？」

「どうするも何も、優が私の事好きとかありえないでしょ？涼でもないのに」

「お前さっ！自分に自信とか無いのか？」

「は？無いに決まってんじゃない。んなもんあるか。っと優！これどうすんの？」

私は優に向かってノートを差し出した。優は、はあっとため息をついて私に分かるように教えてくれた。

〃〃お昼〃〃

（楓と陽いるかな？ま、いなかったらそれでいいけど・・・あ、いた）

私は楓と陽を見つけるとブンブンと手を振った。がそれも後ろのドアから出てくる人物を見てその動きはピタッと止まった。

「お！秋奈っ！2人ともって楓逃げた・・・」

「ドンマイ奏。楓は恥ずかしくて逃げたんだよ」

そう優しく声をかける陽。私はそんな優しくないし優しくても慰め

ようとは思わない。

「全力疾走で逃げたねー！可哀想ー」

「うっ・・・秋奈、お前わざとだろ？わざとだよな？」

「うん。おもいつきしわざとだよー！」

私は笑顔で答える。つというか黒い笑顔って言うやつ？そんな感じ。

「ま、まだあの事怒ってんの？楓だって許してくれたといいじゃんか」

「私も一応許したよ？でもまたそういう事しないように・・・見張ってんだよ」

最後は今の私からは想像できないとても低い声を出していった。こいつは楓にとんでもない事をしたからね。今は話さないけど。またそういう事をしないように私が見張ってるんだよね。

「そ、そういえばさ奏は用があったんでしょ？」

「ん？特に用はないけど。それより聞きたかった事があるんだよ！」

今、用はないって言ったじゃんか・・・ホントバカだよ。コイツ。ってか私にも聞くことあるの？私は奏の顔をじっと見て質問を待った。そして奏から出てきた言葉は・・・

「秋奈の好きな人って優輝だろ？」



## 勘違いから始まる(前書き)

今回は優と秋が面白い事を思いつきます(TOT)

## 勘違いから始まる

「はぁ？何言ってるの？」

奏は何故かとんでもない事をいい始めた。てかそんなわけ無いのに。

「え！秋奈って優輝の事が好きだったの！？てか好きな人いたの！  
」

「えっちょっと陽落ち着いて！私は優の事好きじゃないし、好きな人もいない！」

「それ嘘だろ！だってお前ら2人異常に仲がいいじゃねえーか！」

私は誤解してる陽を落ち着かせていた。奏はずっと優輝の事好きだろ！！って言ってる。

「だから！それは幼馴染だから！第一、涼とも仲いいし！そしてね、私達がお互いを恋愛対象として見てる訳無いでしょーが！陽と奏みたいな関係」

「いや、お前は絶対好きだね！」

「根拠は？」

「勘！」

奏はそう言い切った。うん。コイツには後で楓から酷い言葉を浴びせられる様に楓に嘘情報を流しておこう。そう考えた私は自然に黒

い笑顔になったのか奏の顔から血が引いていった。こういう時は私がやばい事しか考えてないって知ってるから。

「あ、秋奈？何考えてんだ？」

奏は青い顔のままと言う。私はニタッと笑ってこういった。

「奏にそんな罰をあたえようかと・・・」

「ひい！ゴメン！！嘘だって、嘘！！そんな事、思ってるわけねーだろ！」

私はどうしようかと考えながら陽の方を見た。すると呆れた表情で首を振っている。これはやめなさいというサイン。私はちよつとだけ残念に思ったけど陽が言うから仕方無かった。それから奏は青い顔のまま凄い勢いで教室へと帰って行った。そんなに怯えなくても・・・っと思ひ奏の方を見るとビクツと体を震わせ男友達の後ろに隠れた。

「あゝあ。怯えちゃった」

「秋奈がからかったからでしょ。楓に怒られるよ」

そう聞いた瞬間、私は顔を歪めた。楓はめったな事がない限り怒らない。でもそれが奏関係だとヤバイほどキレる。この前も奏がやらかした時、1週間奏とは口もきいてなかったし、きいたとしても態度が冷たかった。その1週間、クラスの人たちは楓だけは怒らせてはいけないと学んだそうだ。

「そんな顔するんならやめときなさい。後さ・・・これ、風見君に

渡して欲しいんだけど」

そういつて陽が差し出したのは4つに折りたたまれた手紙。ほんと2人の関係って微妙だよな」

「ん、分かった。渡しておくよ。じゃあ私、帰るね」

そう言い陽に手を振って私は自分の教室に帰った。教室に入った所で少し違和感を感じた。何ていうかこう、見られてる感じがする。自意識過剰だと思うけど・・・

「風見、はいこれ。彼女からの手紙」

「か!?!・・・ああ、土田ね。てか彼女って言うな!彼女じゃないし」

「はいはい。ってあれ?優と涼は?一緒じゃないの?」

風見は反応が面白い。陽の事を彼女って言うとは必ず顔を赤くする。するくせに陽の前に行くとは途端に無口。ただの照れ隠しだと思うけどそれにいちいち陽も反応するから2人とも面白い。面白がってるのは私、優、奏の3人。だって実際に面白いし。

「優輝と涼は男子に呼び出しくらってる」

「はあ?あの2人また何かやらかしたの?」

「違う違う。ちょっと噂があつてその確認。本当は優輝だけなんだけど涼も何故かついてった」

噂？そんな噂、聞いてないけどな……。涼はホント優輝になつて  
るよね。犬みたい。

「でさ、噂って何？私、知らないんだけど」

「あゝそれわだな。俺からは言いにくいって言うか……。あ！ほら。  
優輝帰ってきたから本人に聞け」

「えっうん。優ゝちょっと！お？」

私が優を呼んだ瞬間、クラス中がこっちをバツて振り返った。何！  
？何なの！？私が驚いていると優が手招きして私を呼んだ。優はベ  
ランダ側にいるからベランダに出て話をする事になった。そんで何  
故か優が笑ってるんだけど……。何で？

「優ゝ噂って何？優に関係するんでしょ？」

「秋にも関係するぞ。っていうかほぼ秋だな」

ん？ほぼ私ってどういう事だろう？何で私に関係するんだろう？私  
の頭の中にハテナがいっぱい出てきた。優はその様子を見て少し笑  
うと噂について説明してくれた。

「つまり、私が優の事を好きになってるの？」

「そ。どうせ広めた奴は奏だろうけど」

「うん、それ奏だよ。私さっきその事聞かれた。それでさっき呼び  
出されてたの？何で？」

「本当かどうか聞きたかったそうだな。俺、なんも言わなかったけど」

「は？いいなよ。私達はただの幼馴染だって。お互い恋愛感情、持ってる訳じゃないんだし」

「っというか何で優は否定しなかったんだろ？なに考えてるんだろ？あ、面白い事かな？」

「ま、お互いに恋愛感情を持ってるわけじゃないけどさ、この状況、面白くねえーか？」

この状況。多分、皆が誤解してる事だろうけど。よく、好きな人がいるのに面白いと言えるよね。その人に誤解されてもいいのかな？

「確かに面白いね。でも優も好きな人いるんでしょ？誤解されるよ」

「は？お前まだあの事信じてたのかよ。嘘だ嘘だ。いるわけねえーだろ」

「いないの！？ちっ！面白いネタになったのに」

「ネタっていうな。それでだな、この状況を利用して翔太と陽菜にデートさせようぜ」

「お！それいい！あの2人はお互いにテレやだから2人でデートはしない。4人とかもあんまり無い。」

「いいよ。面白そう。で、この状況を使うってどうやって？」

私が聞くと優は私に顔を近づけて小声で話し始めた。数分たって、

作戦の内容を理解した私は結構驚いた。その内容をまとめるところいう事

- ・この状況を利用して私と優が付き合うことにする。勿論それは嘘。
- ・付き合う事にした私達はデートをする事にする。そこで私は風見に、優は陽について来てくれる様に頼む。

- ・あの2人は友達思いだから絶対に付いて来てくれるはず。
- ・そして後は当日に様子を見て考える。

つというふうな感じ。

「いいね。その話乗った！涼には話す？」

「いや、涼は嘘つくのがもの凄い下手だろ？だから話さない。秋も誰にも話すな。これは秋と俺の秘密。分かったか？」

「ん。了解。じゃあさ、カップルらしい事しないとだめだよね？」

「ああ。でも登下校くらいだろ」

「それってカップルかな？私達、いつも登下校一緒じゃん。つという事で優がホッペにキスして」

「は！？」

私が言うと優は驚いた顔をしたまま30秒くらい止まっていた。そうそう！この反応が見てみたかったんだ

「マジで言ってるの？」

「小さい頃、普通にやってたし口じゃないから大丈夫だと思って。ふりでもいいよ」

私が言うのと優はうーんと考えてからじゃあ。っと言って軽くホッペにキスをした。ありゃ。私はてっきりふりかと思ってたのにマジでするとは・・・低学年いらいかな。涼は今でもホッペにキスはしてくるしね。学校ではないけど。

「あゝ小6にもなって秋にこんな事するとは思って無かった。何かはずい」

「私も何か恥ずかしいよ。涼は今でもしてくるけど優は2年生になつてから全然してくれなかったもんね」

「そういえば涼は朝もするな。どこの国の挨拶だよって思うけど」

「うん。さすが涼だよ。って教室がうるさい」

「そりゃあんな事すれば騒ぎにもなるだろ。さて、祝福ムードの教室に帰るか。秋、ニツコリしとけよ」

「了解！ ！ どうどうとね」

こうして私達2人の風見翔太と土田陽菜デート大作戦は始まった！！



## 勘違いから始まる（後書き）

小学生でそれは無いだろ！っと思いつながら書いていました（笑）

っというか涼って2人に懐きすぎて犬扱い・・・

## クラス中が大騒ぎ

「2人とも待てー！！！」

「誰が待つか！」

「ごめんなさーい！」

「何あやまってんだよ！」

上から皆、優、私、優の順番。どうしてこういう事になったかと言  
うと約15分前にさかのぼる。

私と優が教室に入ると何か教室中が私達を見てきた。

「優。やっぱりさっきのはやらない方が良かったのかな？」

「知るか！普通にしとけよ。普通にな」

「了解」

私達は今、演技中。さっきやった事のせいで皆が異常に見てくる。  
そのおかげで笑いそうになる。けどその笑いそうになる気持ちを抑  
えてるからお腹が痛い。それは優も同じだった見たいけど。チャ  
イムが終わると同時に私と優は教室を飛び出した。だって絶対に質  
問攻めにあうから。その証拠に私達の机の周りには既に結構の人が  
いるし。チャイムと同時に飛び出して正解だった。しかも今日はこ  
れで帰れる。私の学校は基本的に、その日最後の授業で帰りの挨拶  
をするからいちいち集まらなくていい。って事は皆が帰るはず。

「何で皆、まだいるの!？」

「あ! 秋奈発見!! 優輝も一緒だよ!」

「秋! お前、自分から大声出すなよ!」

「ごめんなさい!」

10分くらい経ってからこっそり教室に帰るとまだほとんどの人が教室に残ってた。で、思わず大声で叫んでしまった。それで、はじめに戻る。私達は今、校舎の中で鬼ごっこ(?)をしています。ま、私達が皆から逃げてるだけなんだけど。

「優! ちょっともう無理!」

私は小さい頃から運動だけは苦手であまりしてこなかった。だからかもしれないけどもう既に息が上がってる。

「もうちょっとだけ頑張れるか?」

「無理! しんどい!」

私がそういうと私の手を握る優。これだけ見ると普通のカップルのように見えるが私達はカップルであるがカップルでない。しかも優が私の手を握った瞬間、次に何をするか分かってたし。優は私の思ったとおりに私の手を握った2秒ほど後には猛ダッシュで走っていた。

しばらく優が私を連れまわしてくれたから何とか皆をまく事ができた。

「ここなら誰も追いかけてこねえーかな」

そう言って優が連れて来たのは屋上。まさか漫画みたいに屋上に来るとは思ってなかった。つと言うか屋上って入ってよかったっけ？  
そう思いながら優に目を向けると優は微笑んだ。

「入っていいんだよ。皆は知らないだろうけど。俺は休み時間の基本ここにいるからな」

「そうなんだ〜いいねここ。で、何であそこで猛ダッシュしたわけ？私しんどいって言ったけどなあ？」

私は満面の笑みで言う。勿論、その満面の笑みの影には黒い笑みを浮かべる。その黒い笑みに気づいた優は頬引きつらせ私の様子にオドオドし始めた。

「そ、それはだな、早くまいた方が体力の消耗は少なくて済むだろう？だからだよ。だからその笑い方はやめてくれ！！」

「まあいいよ。それにしても相変わらず足が速いね〜」

私が言うと優は当たり前と言って私に背を向けた。多分、照れてる。優は見た目はそういうのは軽く流すように見えてるみたいだけど中身はそういう事言われるとめっちゃ照れちゃうんだよね。優は足の速さは学年一。優にかなう人なんて今の所いないほど優は足が速いのだ。

「秋。俺はお前が自分の事を褒めてる所を一回も見ることが無い。それは・・・おじさん達の事が関係してるのか？」

「・・・優って意外と痛いところ突くよね。まあほとんどが父と母の事だね」

それは私にとって寂しく辛い過去。思い出したくない訳ではないけど思い出したい訳でもない。自分からは決して喋った事は無かった。

「優にはさ、話そうと思うけど小6にしては思い話かもよ？」

「いいよ。話して」

そう言った優に私は小6にしてはちょっと重いかもしれない話をし始めた。

## クラス中が大騒ぎ（後書き）

次回、秋の過去が分かります

## 秋の過去（前書き）

秋の過去話ですが前半だけです

## 秋の過去

私が小学校に入って一年半が過ぎ、クラスにも馴染めてきたところだった。ある日の夜、私は母とドライブに出かけた。正直、絶対何か重大な話があると私は分かった。母はあまり私と話す時間を持たない。冷めているから、ではなく時間がないから。父だけの収入では食べていけないと判断した母は、看護師をしている。

だから、私と母は入れ違いになる事が多く、あまり話をしない。こういう夜もそうだ。必ず仕事が入っていて私となんか話す時間なんてない筈だ。

「お母さん。そんなに大事な用なら早く話して」

私は少し苛立ち気味に言った。私は職場でキビキビ働く母の姿が大好きだった。だから、私と話す時間なんてあるなら睡眠か仕事に回してほしかった。この後、この頃の私にとっては重すぎる話を聞かされることになる。

「り、こん・・・？」

「・・・そう。お父さんとはなした結果よ・・・秋には悪いって思ってるわ。ごめんなさい」

母は涙を流しながら下を向き私に謝った。私は驚きで涙なんか出てこなかった。涙が出るほど状況を理解してなかったから。その日から私はお母さん、お父さんと呼んでいた二人を母と父と呼ぶようになった。



「それからかな。私が自分の事を褒めたりしなくなったのは。褒められても嬉しいって感情はわいてこなかった。自分の事にはあんまり興味がなくなったのもそれくらいの時期かな」

「・・・辛くないのか？」

「辛い、ね・・・勿論、何ヶ月かはその気持ちでいっぱいだったよ。でもその何ヶ月かだけ。その後は現実に慣れていたのよ。父がいないね」

父がいなくなつて数ヵ月後には私の顔には笑顔が戻っていた。けどそれは学校や外だけ。家では母とは会話を交わさないし、笑顔も見せない。母は何度も話しかけてきたけど話そうなんて思わなかった。家庭崩壊って奴かな。今では帰っても誰もいない日々が続いている。

「ま、家に帰って香が来るだけマシだけどね」

「秋と香は幼稚園の頃から姉妹みたいだったもんな」

そういつて笑う優。あいはらかおり相原香。幼馴染の中で特に仲が良い子。家が近いから親も私達も仲良くして来た。そしてあの日以来、香のお母さんが許可してくれた時は泊まりに来てくれる。つと言うかほぼ毎日ってペースで来る。しかも香のお母さんも一緒に。母はそんな相原親子に礼を言ったそうだ。毎日毎日来てくれてありがとうって。香にもお父さんはいない。それは仕事の都合での離婚だと私は聞いた。それで相原親子は何故か私の家に居座る様になった。ま、別にいいんだけどね。

「そうだねーあ、そういえば今日は香が優の家に突撃するって言っ

てたよ」

「げ！？あいつまたへんな事考えてるんじゃないやねえーだろうな！？」

「大丈夫。私と涼も監視でついてくから」

香は私達の中で一番、面白い事が大好き。それでその面白い事を探すというか試すというか、やる対象が何故か優。本人が言うには反応が面白いかららしいけど。私たち4人は長い付き合い。だからこそ分かる事、分からない事がある。私達は小学校に入ってからずっと仲良くお互いの家に遊びに行ったり、それぞれの親と出かけた事もあった。だからたまに思うことは私にとって3人は友達よりも近い存在だ。誰よりもね。

「優、ありがとね。話し聞いてくれて」

「秋が礼、言うなんて貴重なところ見たな。後で香達に言っとこうじゃ帰るぞ」

そう言って笑う優。そして座ってる私に手を差し出す。その手をとって私達は夕日に染まった道を帰っていった。っとそんな綺麗に終わるはずも無く私が優の手を取ろうとした瞬間、校内放送が流れた。

『6年1組、山崎秋奈さん、戸倉優輝君。至急、職員室に来てください』

私と優は顔を見合わせハテナを浮かべながら職員室に向かった。

「失礼します」

私達は声をそろえて言う。するとある一人の人物だけが私達の声に振り向いた。担任の沖家千穂おきいえちほことちー先生。ちー先生は私達に手を振り自分の席まで来るように手招きをした。

「2人とも、何で呼ばれたかは分かる？」

2人で首を振る。明らか、ちー先生の背後に鬼が見えてるんですけど・・・優もそれに気づいたみたいで笑顔ではいるがその笑顔が引きつっている。多分、今の状況だと誰もがこうなると思う。ちー先生はそんな私達2人を見て机の上にあった紙を私達に向ける。それを見た瞬間、テストだと分かった。だって右上に点数書いてあるし。そしてその点数を見て引きつった顔がまたさらに引きつる。そしてそーっと顔を上げる。

「2人ともさあなめてんの？2人そろって20点以下って」

そう言いながら笑うちー先生。そして背後には鬼が・・・私と優は2人そろって20点以下を取りちー先生に怒られた。だって今回のテスト難しかったしと反論すると皆は平均点取ってるといわれた。それから私達はテストを返してもらい今、家に帰っている。

「なるほど。6時間目に俺達だけテストが返されなかったのはこういう事か」

「そうだね・・・どうしよう。これ香に見つかったらしごかれるよ・・・」

香は学年一、頭がいい。そして頭の悪い奴を見ると誰であろうと説教&勉強をトラウマになりかけることだってある。だって私と優がその経験者だから。あの勉強会は死ぬ・・・。完璧に死ぬ。そんな

・ 事を思いながら家に帰ると香に即刻見つき、私は地獄を味わった。  
・

## 秋の過去（後書き）

本文で香のお父さんがいないのは仕事上と言ったのですが事実です。

今、海外で仕事をしています

## 地獄！？（前書き）

更新遅くなりました！

落ちが無いかもしれないです・・・

## 地獄!?

「はぁ・・・」

朝からため息をつく私は何故か朝からクラスの女子に囲まれてしまった。

「秋奈く？戸倉君とはデートしたあ？」

そう言って来たのはこのクラス1の秀才。美波。人をいじめるのが大好きなDSです・・・怖いです。正直、逃げたいです。うん。逃げたい。全力で逃げたい。

「聞いているう？あきなあ？」

「え、えっとね・・・」

私が喋らないのを見て何故か語尾を強調する美波。さらに怖さが倍増・・・。っと横から手が伸びてきて腕を掴まれた。驚いてその、私の腕をひばってる人を見た。

「え、涼？」

私の腕を掴んでいたのは涼だった。もう片方の手には優が・・・なんで？優は何か苦笑いしてるし、私は私で何がどうなってるのか分からないし、涼は何か怒ってるみたいだし・・・とにかくこんな涼を見たのはたぶん、初めて。それから涼は私達のクラスの隣にある使っていない教室に私と優を入れた。

「りよ、涼？何怒ってるの？」

「・・・2人は本当に付き合ってるのか？」

何故か私と優を交互に睨む涼。優は付き合っているとハッキリ言った。勿論私も言った。

「付き合ってるよ。当たり前じゃん」

「・・・本当に？」

私と優は頷く。本当は付き合っているだけだけど計画を進めるには付き合ってる事にしなきゃいけない。すると涼は何故か満面の笑みになった。え、ここで笑うかな？普通。

「りよ、涼？お前、何考えてんだ・・・？」

「俺には何にも教えてくれないんだ？」

優が聞いて涼も聞く。涼が聞くと優は驚いて黙った。私はそんな2人を訳の分からないまま見つめていた。ふと、涼がこっちを向き歩き始めた。そして私の前で止まるといきなり飛びついてきた。

「え！ちよつと涼！？どうしたの？」

私は普通に聞いた。本当に普通に。私が聞くと涼はしばらく抱きつき離れた。顔に笑みを浮かべて。そうして涼は喋り始めた。

「優はさっきみたいに自分の彼女が他の男子に抱きつかれても止めないんだな」



笑いながらそういう涼。しまったという顔をする優。ついていけない私。もう私は諦めて、2人を見ていることにした。だって私には2人が何してるかまったく理解できないし。

「それは、涼だからだろ？涼だから許せるんだよ」

「でもちよつとくらい嫌な顔をするよな？彼氏だったら」

「別に表に出さないだけで内心、嫌だと思ったぞ」

「ウソだ。優は顔に出やすいタイプだから直ぐわかるんだよ。いやだとは思わなかっただろ」

もう飽きてきた。だってさっきからこういうのばっかだよ？誰だって飽きるよ。普通の女の子だったら自分で喧嘩されたら嬉しいとか思うんだろうけど相手は幼馴染。しかもどっちも好きとかそういう感情は無い。つまり私にはこんな状況は何も嬉しくもないし楽しくも無い。

「あのさ、つまり涼は何が言いたい訳？」

「2人は絶対に付き合っていないよね？」

しばらく沈黙。どうして涼にバレたのかは知らない。ただ分かってる事は涼は絶対に私達が付き合っていないと分かっている。絶対に自分に自信を持ってる。私は優の方に顔を向けると優も逃げれないと分かっていたらしい。それで話す事にしたと思う。でもさ、その前に聞かなきゃいけないことが私には沢山あるんだよね。

「優はさ、気づいてるかわかんないけどバレバレだよ。皆」

私が言うのと優と涼はえ？って顔をした。私は優だけが気づいてないと思ってたから涼も気づいてない事にはビックリした。ま、今はそんなこと思っているよりも先にやる事があるんだけどね。

「早く出てきなよ。いい加減しないと一人一人の恥ずかしい事を言ってくよお？」

「わっ！それだけはやめて下さい！！」

私は何気に色々な情報を持ってるから恥ずかしい情報とかはいっぱいあるんだよね。でクラスの皆はその事を知ってる。それから私は皆を追い出して話を続けた。

「涼は誰から今の事聞いたの？」

「・・・」

涼の顔が引きつった。ビンゴだねこれは。っというか、私が気づいてるって分かっているのに無言ってのはよくないと思うよ。まあ、それほど私よりその誰かの方が怖いんだろうけど顔に出ちゃったら仕方ないよね。私が知る限りだと優は顔に出やすいけど涼も顔に出やすいよ。優ほどじゃないけど。

「・・・香でしょ？涼が聞いたのって」

涼は答えなかったけど私が無言で笑うと即刻頷いた。多分、黒いオーラ（？）が背後に出ていたからだと思う。だって早く答えない涼が悪いし。

「さすが香。私と優の考えをお見通しだね」

「当たり前でしょうが。で、秋も私の事をよく分かってるわね。だからさっき私には気づいてないふりをしたんでしょ？」

「んゝ正解」

優と涼は聞き覚えのある声に驚き教室の中を見渡した。窓の方に顔を向けたときに棚に座っている香を見たときに2人は驚き同時に私の顔をガン見した。いや、まあ黙ってた私も悪いと思うけど底まで驚くことかな？香がいると気づいたのは皆がいると気づいた少し後。何か分からないけど窓の方から気配を感じたんだよね。で、皆を追いついた後もその気配があったから香だと気づいた。私の脅しかな？何ていうか情報に動じないのって香ぐらいしかない気がする。私はそこそこ香のことを知ってるけど香はそれ以上に私のことを知ってるからやり返しがハンパない。だから、香だって判断するのは難しくは無いんだよね。涼と優は気づいてなかったみたいだけどね。私には涼がこのことに自分で辿り着いたとは全然思ってたかったからね。誰かが涼に言ったとしか思ってた。涼はそんなに鋭くは無い。まあその事に気づいたのは涼が抱きついて来た後だけどね。

「それにしても香は凄いなゝ！私、最初涼が誰かに教えられたって全然気づいてなかったもん」

「褒めてくれてありがとう。で、あなた達本当は付き合ってたの？」

「気づいてるのに聞かなくていいじゃん。ま、付き合ってたんだけどね。でも面白いこと絡みだよ」

すると香の動きが一瞬止まった。おお、やっぱり反応した！香なら必ず反応すると思ってたんだよね。そこで私は食いついた香と教えて欲しそうな涼に何故私達が付き合ってる振りをするのか、面白い事とは何かを全部話した。

## 作戦開始？

「へくなるほど。そういう事だったの」

「うん。で、香はどうする？」

私はこの5分の間に私達の計画を香と涼に話した。涼は何でかホッとして香はニヤリと笑いそうだった。香がニヤリとする時、それは面白い事を聞いたり思いついたりする時の顔。香の中で私が話したことは面白い事と認められたようだ。

「勿論、手伝うわよく！そんな面白い事を黙ってみてる訳無いじゃない！それにしてもそれだけの理由でよく優輝が秋のホッペにキスしたわね」

「そうだね。優も教室の反応を見たかっただけでしょ？てか優からって久しぶりだった！涼は今でもしてるし、ねー涼！」

「ばっ！それをコイツの前で言うな！・・・してないし！」

「ふふっ隠しても無駄だよ涼。私は前から知ってるから」

そうニコツと笑う香。あ、面白がってる。涼、また香に大変なことされるかな。そう思いながら香を見てると不意に香がコッチに近づいてきてニヤリと笑った。

「で、あの2人は何て答えたの？」

「どっちもOKってさ。で、デートは今週の土曜。映画に行く事に

なってるよ」

「そう。じゃあ私達は後からついて行くわ。ついでに指示も出すから優輝と秋は普通にしてなさい」

あ、やっぱりついて来るんだ。っとその時、横から涼は凄い顔でツッコんだ。

「ちよっ！何で俺も行く事になってんの！？」

「当たり前でしょ！ばれた時の対策よ」

ああゝ2人で遊びに来た、偶然だねって事かゝ！香はホント凄いな。後の事しっかり考えてるし。私と優なんか全然考えずにこのこと思いついたからどうしようか迷ってたんだよねゝ香から指示が出ればスイスイと進むよねゝ

「じゃあそういう事で。あ、秋！あんた、どんな服で行くつもり？」

「え？服？いつもの格好だけど」

「いつもの格好って・・・」

私のいつもの格好とは、ジーパンに普通のシャツ。後はスニーカーくらい。紙の飾りとかオシャレとかにはまったく興味の無い私はいつもの格好がこれだ。家にもこんな感じの服しかない。香は、はあと深いため息をついた。

「私が金曜日、秋の家に服とか持って泊まりに行くからお母さんに言っというて」

「はい！って泊まるの？まあいいけど。じゃあ教室帰ろう！」

そういつて私は一番に教室に帰って行った。そして放課後、私は珍しく香と2人だけで帰った。

——土曜日——

「ねえ香・・・ホントにこの格好で行って大丈夫なの？」

「あんたね・・・私が嘘ついた事あった？」

「うん」

「いや、そこはないって言うところでしょう！まあ、行った時の皆の反応を見るといいわ」

「う、うん・・・」

私は今の格好に不安になりながらも集合時間に遅れないように急ぐのであった。同時刻、優たちはと言うと・・・

〓優輝視点〓

「あのさ優輝。私は秋の服装が気になるんだけど」

「まさか秋の奴、学校に来てると同じ服装で来るんじゃない・・・」

「ああ、そこは大丈夫だと思うけど・・・秋が拒否したらそのままで来るかもな・・・」

そういった瞬間、俺も含めた3人の顔が少し青ざめた。いや、普段の格好でこられたら結構驚くし。香が準備してくれてるぽかったけど秋が拒否ったら意味ないしな・・・そう思い俯いていた俺に遠いところから誰かが呼びかけてきた。それは・・・

「皆、待った？ゴメンね」

その時俺は秋の声と顔をした別人かと思ってしまった。それと同時に俺の顔が熱くなって行くのを感じた。

〳〵秋奈視点〳〵

私はちよつと焦っていた。だって時間が過ぎちゃってるんだよ!! 陽は時間に結構うるさい人で時間を過ぎると怒られちゃう。まあ今日は風見がいるから怒らないだろうけど後で絶対言われるから今、走ってます! 全力で! あ! 優たちが見えてきた! 私はお腹からおもいつきり声を出して皆の名前を呼んだ。

「皆、どうしたの? や、やっぱり変だった! ?」

「いやどうしてそういう考えになるの! ? 超似合ってるじゃん! ねえ優輝! !」

「・・・ま、まあ似合ってんじゃないの?」

優はそういつて背を向けてしまった。え、なにその微妙な反応! ? 私としてはこんな服着るの初めてだからそこハッキリして欲しいんだけど! やっぱり似合ってなかったのかな? 私は優に近づいて本当はどう思っているか聞いてみた。優の顔が赤い事を知らないまま。



「陽！優が目を合わせてくれないー！」

「はいはい。優輝ーそろそろ行かないと映画遅れるんですけどー」

ニヤニヤしながら言う陽。同じくニヤニヤしながら優を見てる風見。この2人・・・すっごいお似合いだね。うん。この人を面白がるように見る目とか、その時にいう事とか。もう付き合っちゃえばいいのについて思うんだけどね。お互い恥ずかしがり屋だからね・・・

「うるさいな！・・・行くぞ秋！！」

「え？わっ！！」

優はそういうとぐいっと私の手を掴んで歩き始めた。私はいつものスニーカーじゃないからこけそうになった。まあ優がささえてくれたけどさ。流石優。私は陽と風見の方を見ると驚いた。2人は私達の姿など目に入っていないなくて楽しそうに2人で話している。・・・あれ？前はあんなに沈黙続киだったのに何で？？私は頭がパンクしそうなくらい考えたけど結局答えが分からず、大人しく優についていった。

デートだ!! (前書き)

今回はつもより短いかもしれません

デートだ!!

あれから2時間映画を見て、今は近くの雑貨屋によって皆でキーホルダーを買おうって事になった。しかも、それぞれ交換で。私は優と。陽は風見と。そして選んでいる最中。

「秋、聞きたい事があるんだけど」

陽がいきなりそう私に聞いてきた。

「何？」

「秋は優輝の事どう思ってるの？」

「優輝？」

優輝は幼馴染で仲が良いし、私は優の事を大事な存在だと思ってる。それは涼も、香も一緒。数少ない私の幼馴染だもん。

「大切な人だよ？ 凜も香も陽も皆。当たり前でしょ」

そういった私。すると陽は答えを予想していたのかため息をついた。

「ええっ！？ 何でため息！？」

「優輝が可哀想だわ・・・」

陽が訳のわからない事を言い出した。陽の思っていることは私には理解が出来ない事ばかりなので私はキーホルダー選びに戻った。そ

して私が選んでレジでそれを買って店の外でベンチに座っていると風見がやってきた。

「よっ秋」

「早かったねー！迷って遅くなるんじゃないかと思った」

「大分迷ったぞ？まあ優輝ほどではないが」

「優遅いよねー陽も遅いけど。陽はいっぱい手に持ってたよ。色々」と

陽は両手に色々持って悩んでいた。何でそんなに悩むか分からないから私は直ぐに決めたけど。ちなみに私が選んだのはバットとグローブが付いているキーホルダー。優が持つからね。

「風見はどんなやつ選んだの？」

「お、俺か？・・・ハートでピンクのキーホルダー・・・」

「おお！陽の趣味ドンピシャ。良かったねー！それにしても、買うのに勇気いるでしょ」

「定員さんに微笑まれたよ・・・余計な一言もつけて」

「何ていわれたの？」

私は風見にそう聞いたんだけど風見は教えてくれなかった。多分恥ずかしい事でも言われたんじゃない？だから自分でそれを言うのも恥ずかしいんだと思う。しかし、優と陽遅い！！！！

「優は何でこんなに遅いの？」

「迷ってるからだろ」

「あー・・・陽も同じだ。あの二人はパパッと決められないの？」

「いや、それは無理だろう」

「何で？」

私が聞き返すと風見は黙った。呆れたような困ったような表情をしながら。何でだろう？私は疑問に思いながらも別の話題を振ってみる事にした。

「風見はさあ、陽のどこが好きなの？」

「え！？な、何でそんな事聞くんだよ！！！」

私が聞くと風見は動揺しながら言った。わーむちゃくちゃ顔真っ赤なんですけど。ヤバ。チョー面白い！！

「まあそんな事はほっというて！どこが好きなの？」

私がニヤニヤしながら言うとう風見は顔を逸らして小さな声で言った。

「土田といると安心するんだよ・・・」

くうー！！ヤバイ！陽に報告したくなってきた！しないけどね。したら色々面倒な事になりそうだからね。そして暫く雑談が続き、あ

の二人はまだかなー？　っと思っていた頃に二人が店の中から出てきた。私は二人に文句を言いお腹空いたからご飯食べようかという事になった。

「秋は作ってきた？」

「作ってきたよ。ちよつと食べる？」

「貰う！二人は？やっぱ貰うの？」

「俺は秋の作った弁当があるからいい。翔太は？」

当たり前のように言う優。確かにあるんだけどね。香が優の分も作って行きなさいって言ったから作ったけど。実は弁当を二人分作るのって結構しんどいんだよ！

おかずは同じだけど私のプライド的なものが同じ様に作るのを拒むんだよ！！だから一つだけ違うおかずを入れてみたり、果物も別にして。しかも二人分だから量自体違うし。優は成長期か知らないけどよく食べるし。香が持ってきた弁当箱が普通のよりちよつと大きいからおかずの敷き詰めがいはあったけどさ。

「俺は何も持ってきてないぞ？何か相原から電話があつてご飯は必要ないから何もいらないうって」

おおー！流石香。こういう事かと説明すると、風見は無駄遣いはしない方なので絶対買い弁はしない。だとすれば親に頼むだろうから香が電話を入れて持ってこさせないようにする。それで実はもう一人の人にも電話を入れてある。それは誰かと言うと・・・

「あ、えつと、こ、これ！！」

「つ、土田？え、弁当？」

「迷惑じゃなかったら・・・食べて」

そう！もう一人の人物とは陽でした！！陽には風見の分の弁当を作ってくる様に言っておいたのです！まあ全部香が考えたらしいけど。風見は陽の差し出した弁当を受け取った。よし！大成功！私達は何処か座れる所を探してそこに座った。

## 作戦通り？

あれから2時間映画を見て、今は近くの雑貨屋によって皆でキーホルダーを買おうって事になった。しかも、それぞれ交換で。私は優と。陽は風見と。そして選んでいる最中。

「秋、聞きたい事があるんだけど」

陽がいきなりそう私に聞いてきた。

「何？」

「秋は優輝の事どう思ってるの？」

「優輝？」

優輝は幼馴染で仲が良いし、私は優の事を大事な存在だと思ってる。それは涼も、香も一緒。数少ない私の幼馴染だもん。

「大切な人だよ？ 凜も香も陽も皆。当たり前でしょ」

そういった私。すると陽は答えを予想していたのかため息をついた。

「ええっ！？ 何でため息！？」

「優輝が可哀想だわ・・・」

陽が訳のわからない事を言い出した。陽の思っていることは私には理解が出来ない事ばかりなので私はキーホルダー選びに戻った。そ



して私が選んでレジでそれを買って店の外でベンチに座っていると風見がやってきた。

「よっ秋」

「早かったねー！迷って遅くなるんじゃないかと思った」

「大分迷ったぞ？まあ優輝ほどではないが」

「優遅いよねー陽も遅いけど。陽はいっぱい手に持ってたよ。色々」と

陽は両手に色々持って悩んでいた。何でそんなに悩むか分からないから私は直ぐに決めたけど。ちなみに私が選んだのはバットとグローブが付いているキーホルダー。優が持つからね。

「風見はどんなやつ選んだの？」

「お、俺か？・・・ハートでピンクのキーホルダー・・・」

「おお！陽の趣味ドンピシャ。良かったねー！それにしても、買うのに勇気いるでしょ」

「定員さんに微笑まれたよ・・・余計な一言もつけて」

「何ていわれたの？」

私は風見にそう聞いたんだけど風見は教えてくれなかった。多分恥ずかしい事でも言われたんじゃない？だから自分でそれを言うのも恥ずかしいんだと思う。しかし、優と陽遅い！！！！

「優は何でこんなに遅いの？」

「迷ってるからだろ」

「あー・・・陽も同じだ。あの二人はパパッと決められないの？」

「いや、それは無理だろう」

「何で？」

私が聞き返すと風見は黙った。呆れたような困ったような表情をしながら。何でだろう？私は疑問に思いながらも別の話題を振ってみる事にした。

「風見はさあ、陽のどこが好きなの？」

「え！？な、何でそんな事聞くんだよ！！！」

私が聞くと風見は動揺しながら言った。わーむちゃくちゃ顔真っ赤なんですけど。ヤバ。チョー面白い！！

「まあそんな事はほっというて！どこが好きなの？」

私がニヤニヤしながら言うとう風見は顔を逸らして小さな声で言った。

「土田といると安心するんだよ・・・」

くうー！！ヤバイ！陽に報告したくなってきた！しないけどね。したら色々面倒な事になりそうだからね。そして暫く雑談が続き、あ

の二人はまだかなー？っと思っていた頃に二人が店の中から出てきた。私は二人に文句を言いお腹空いたからご飯食べようかという事になった。

「秋は作ってきた？」

「作ってきたよ。ちよつと食べる？」

「貰う！二人は？やっぱ貰うの？」

「俺は秋の作った弁当があるからいい。翔太は？」

当たり前のように言う優。確かにあるんだけどね。香が優の分も作って行きなさいって言ったから作ったけど。実は弁当を二人分作るのって結構しんどいんだよ！

おかずは同じだけど私のプライド的なものが同じ様に作るのを拒むんだよ！！だから一つだけ違うおかずを入れてみたり、果物も別にして。しかも二人分だから量自体違うし。優は成長期か知らないけどよく食べるし。香が持ってきた弁当箱が普通のよりちよつと大きいからおかずの敷き詰めがいはあったけどさ。

「俺は何も持ってきてないぞ？何か相原から電話があつてご飯は必要ないから何もいらなんて」

おおー！流石香。こういう事かと説明すると、風見は無駄遣いはしない方なので絶対買い弁はしない。だとすれば親に頼むだろうから香が電話を入れて持ってこさせないようにする。それで実はもう一人の人にも電話を入れてある。それは誰かと言うと・・・

「あ、えつと、こ、これ！！」

「つ、土田？え、弁当？」

「迷惑じゃなかったら・・・食べて」

そう！もう一人の人物とは陽でした！！陽には風見の分の弁当を作ってくる様に言っておいたのです！まあ全部香が考えたらしいけど。風見は陽の差し出した弁当を受け取った。よし！大成功！私達は何処か座れる所を探してそこに座った。

「優はい。お箸」

「ん。お、卵焼き、ウィンナー、プチトマト！」

「確かそれ好きだったでしょ？」

「おお！やっぱ、弁当にはこれだよな！・・・げっ切り干し大根」

「あ、それは嫌いだったよね？良かった！いれておいて」

私は満面の笑み、優は嫌そうな顔。優は切り干し大根が大嫌い。だからって残したら怒るけどね？文句を言いながらも切り干し大根を全部食べた優。オーえらいえらい。

「お、秋！それくれ」

「それじゃなくてチーチクね。はいどうぞ。っと言うか自分のも食べてよ」

「おおーチーチク、ウマ！」

「はいはい。あ、陽！それとこれ、交換しよ」

「良いよ。はいどうぞ」

「アリガトー！風見もいる？」

「おお。貰う。チーチクどれ？」

「チーチクを狙うのか！？チーチク俺の！」

「優はさっき食べたでしょうが。だからこれは風見の分」

見たいな会話を繰り返しながら食べた私達は暫く雑談をしながら歩いた。途中でクレープ屋発見！私と陽はすぐさまとび付き、優と風見の分も頼みながら自分達は何にしようかと話し合った。その後はクレープを買ってから近くの公園でベンチに座って皆で話しながら食べることにした。

「秋何？」

「イチゴチョコ」

「じゃあちよつとくれ」

「いいよ」

私がそういうと優は私のクレープにかじりついた。私と優と涼と香で来る時は一気に4つの味を楽しめるのだ！まあ、香はケチだからそんなにくれないけどね。

「お、美味しいな。ほら。俺はバナナチョコ」

私もさっきの優と同じ様に優のクレープにかじりついた。お、美味しい。次来る時はバナナにしようっと。

何て思いながら私は自分のクレープを夢中で食べていたのです。

## 陽が思う事（前書き）

今回短めです。

## 陽が思う事

駅で待ち合わせをしていて、秋が現れた時は正直、驚いた。だって、あの秋がスカートはいたら別人。普通に可愛かった。香が着せたんだろうけどさすが香だと思う。初め私は、秋と優輝が付き合ってるってのは嘘だと思ってた。でも、優輝の反応を見ていくにつれ、付き合ってるのは嘘だってわかったけど、何かしら思ってるのかは分かった。分かったんだけど・・・変なところで冷静すぎる。優輝は。

そして私は、今、自分の持っているキーホルダーを眺めながら思った。風見ってどんなのが好きなの・・・！？私が悩んでいると、私と同じ様に頭を抱えてるよく知った顔を発見。私はその人に話しかける。

「優輝？何やってんの？」

「ん？ああ陽菜か。秋って何がいいんだ？」

「はあ？優輝なら分かるんじゃないの？よく一緒にいるじゃん」

「アイツ自分の事をあんまり話さないんだよ・・・だから好みとか知らん」

何それ。君ら、他から見れば完璧カップルなのに。秋と優輝は初対面の人が見ればカップルに見える二人。私は幼馴染って知ってるからそんな事を思ったのは最初だけ。けど、本当に二人を知らない人から見ればカップル。実はそんな二人が羨ましかったり、理想だったりする私。多分、ほとんどの人たちはそうだと思う。



「何だよ・・・んじゃ教えてあげようか？」

「うーん・・・それもなあ・・・いや、俺が自分で決める！陽菜も風見の、さっさと決めちゃえよ」

優輝はそう言って私の手元を見る。しまった！商品持って来ちゃった・・・多分、今の私は真っ赤だと思う。いや・・・恥ずかしい・・・。この後無事、選べた私と優輝はその後、秋に散々文句を言われた。

忘れてた！

「疲れたー」

あれから私達は散々遊んだ後、私の家に行く事になった。何でって思うでしょ？それが3人の返事が1番近いから、だそうだ。・・・何かそれも嫌。ちなみに今は皆でリビングでゲーム中。私&優VS 風見&陽でゲーム中。私と優はいつもしてるから流石にコンビネーションはいいけど、何で風見と陽は完璧なんだ・・・？初めてやるという2人に私達は追いつかれそうだった。ギリで勝ったけど。そして始めの言葉。私の家に来て約30分は経っていた。

「というか、2人とも強すぎ」

「流石にやりこんでるから勝てるけど、初めてだったら確実に負けてたよ。ね、優」

「ああ。何でお前らこそ、そんなに強いんだよ！俺らこれ3カ月やってやっと息が合ったのにな」

「そうだよ。ちょっと傷ついたよ。あ、皆飲み物持って来ようか？」

「そうだな。じゃあ俺も行くか。陽菜と翔太は待ってろよ。つかゲームしとけ」

優が命令とバカリに言うのと2人は頷いてゲームに戻った。私は優とキッチンに向かう。というか、優は自分ちみたいになってるよねー別にいいけどさ。

「そうそう、えっとはいこれ。渡すの忘れてた」

「お、サンキュー。えっと、じゃあ、俺も」

そう言って差し出された物を私は受け取る。中身を開くと黄色の星のストラップが出てきた。おーカワイ！私は正直、ピンクとかそう言う系が好きじゃなくて黄色とかの方が好きなんだ。やった！しかも星だし！

「アリガト！おー優にしてはセンスがいい！」

「おいちょっと待て！何だそれ。酷すぎるだろ・・・お！グローブ？バット？」

「あそれ野球のやつ。優野球でしょ？だから」

「おーサンキュー！」

私達はそれぞれ交換した。そしてふと思ったことが・・・あの2人は交換したんだろうか？私は後で聞いてみようと思い、コップを優と2つに分けて持っていた。そしてキッチンでは聞けなかった2人の会話。

「ちよっ土田それズル！」

「風見が早く取らないからでしょ。わっ！何で攻撃を私に放つのさ！」

「・・・八つ当たりだ」

「ヒド！」

なんだかんだで仲良くなってるじゃん。・・・でも風見は何で仲間の陽に攻撃を当ててるのかな？それはあっちの魔物に当てなきゃいけないんじゃない？私はため息をつき暫くその光景を見ていた。優も横に並んで。そして2人が目的のものを取って、ハイタッチをした所で声をかける。

「はい、2人とも。次私達」

「あ、秋！？いつからいたの」

「・・・今さっき」

本当はもっと前からいたんだけどそのことは隠しておこう。何か隠したほうがいい気がする。というか、2人ともあからさまに安心するのやめなよ。それから陽達は2人で雑談してた。私と優はゲーム。それから時間は経ち、6時になった。

「もう6時だよ？帰る？それともご飯食べてく？」

「俺食べてく」

「優は分かってる。電話しなよ」

私がそういうと優は家の電話を使って自分の家に電話する。と、直ぐに私に代わる。

「もしもしおばさん？うん。分かった。また電話するよ」

私はそう言って電話を切った。というか、おばさんも慣れたねー初めは無茶苦茶遠慮してたのに・・・いや、普通だったかも？初めと言っても結構前だけどね。

「2人はどうする？」

「どうしようかなあ・・・お母さんに聞いてみよ。秋、電話貸して」

私が頷くと陽は電話し始めた。風見はその次に電話して聞いてた。で、今日は香も来る筈だから・・・5人分？・・・多いね。私が考えているとチャイムが鳴った。と同時に玄関が開き香が入ってきた。

「秋ーただいまってえっ！？何でいんの？」

「おじゃましまーす」

「香と涼？何でその組み合わせだよ」

「・・・あ。涼の分も作らなきゃ」

というか、涼の分も忘れてたよ。そうだった。今日は涼も居たんだった。忘れてた・・・おお？私が涼の分忘れてた事に涼が気付いたのか子犬みたいになってんですけど。か、可愛い・・・

「涼、魚肉ソーセージ食べる？」

「・・・食う」

完璧に犬だ！餌に釣られた犬じゃん！！私は涼にソーセージを渡しながらそんな事を思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3500u/>

---

私と友達と日常

2011年11月13日14時11分発行